

Information Gap Practices : What are They and How can We Use Them in Our Classes?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本井, 昇 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/299

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



インフォメーション・ギャップ・プラクティスとは 何か又授業のどの部分でどう使われるか

Information Gap Practices: What are They and
How can We Use Them in Our Classes?

本 井 昇

MOTOI, Noboru

1989年の指導要領改訂以来、2013年度に高校で実施された今回の改定まで、カタカナ表記で指導要領に導入された‘コミュニケーション’という用語が24年間指導要領の中に存在し続けている。これは、中学・高校の教育現場で何らかのCommunicative Teachingと呼ばれる方法論の採用が求められていることと同義語である。しかし、伝統的な文法訳読方式やaudiolingualismのような、ある言語分析の手法をそのまま授業に応用する形の方法論との整合性が取れず、本格的な浸透が困難という印象を受ける。

何故そうなるのか。要因の一つは、恐らく英語教育関係者の中で、授業では‘言葉を覚えること (skill-getting)’ (Rivers and Temperley, 1978) と‘伝達の目的で言葉を使うこと (skill-using)’ (ibid.) の両方を扱う必要のあることが正確に認識されず、目に見え易い skill-gettingの領域の発表や報告ばかりで、skill-usingの作業に関しては、熟考の上で行われる熱心な実践やその報告が少ないことにあるというのが筆者の私見である。教師の場

合、こうした領域はアンケート調査等を行ってもなかなか協力して貰えないことから、学習者の場合のような、ある程度実証的なデータが得られ難く、少ない資料 (Sato, 2002; 鳥飼, 2011) や研究会での発言、雑談等から受ける印象に多くを頼らざるを得ない。しかし、そうして得た断片的情報を念頭に自分自身の体験も踏まえて考えてみても、‘communicativeの方法論を熟知し、授業運営にも習熟した中学・高校の教師が少ない’、‘よく知っている教師は職場では孤立する傾向が強く、新しい考え方の浸透が難しい’、また‘研修に参加し、積極的意見を述べる教師でも、内心では自分の慣れ親しんだ伝統的な方法を変えたくない場合も多い’等が原因として考えられる。

この小論では、現在Communicative Teachingの導入を目指すことが要求されている英語教師に、自信を持って実験授業や野心的な教育活動に取組んで欲しいとの立場から、Communicative Approachの中心的な言語活動であるinformation gapを含む活動の理解を深め、授業で実現して行く可能性について、

キーワード：閉じられたインフォメーション・ギャップ・プラクティス、開かれたインフォメーション・ギャップ・プラクティス、一方方向のインフォメーション・ギャップ・タスク、双方向のインフォメーション・ギャップ・タスク、PPPスタイルの授業

Key words : closed information gap practice, open information gap practice, one-way information gap task, two-way information gap task, PPP (Present-Practice-Produce) format

不十分ながら検討することとしたい。

1. Communicative Teachingとは何か

所謂Communicative Teachingと呼ばれる方法には様々あり、Communicative Approach, Communicative Language Teachingなどの用語が馴染み深いのが、その意味の違い等々については余り深く理解されてはいない。また、1980年代に一世を風靡したKrashen/TerrellのNatural Approachなども、この範疇に入り、直ぐに発話を求めず、その遅れを認めるタイプのものと言える。本来、完璧な教授法が存在しないが故に行われている‘折衷主義(eclecticism)’の上に成立するCommunicative Teachingである(本井, 2006)が、手始めに幾つかのポイントとなる事柄を整理すると以下のようになる。

1.1 Communicative Teachingは何を目指すのか

Communicative Teachingの目標又は目的は、学習者の中に‘伝達能力(communicative competence)’を開発し、習った言語を通じて伝達を行う能力を身につけさせることにある。そして、その伝達能力とは、①Grammatical competence(言語のcomponent skillに関する知識・技術)、②Pragmatic competence(言語の果たすべき機能に関する知識・技術)、③Discourse competence(談話の流れを作り出す知識・技術)、④Strategic competence(レパートリー不足を他の方法で補ったり、効果的な学習法を開発したりする能力)の4つの能力の総和であり、統合された能力と考えられている。

通常、人が‘言葉を習う’という場合、上記のGrammatical competenceのみを指す場合が多い。伝達能力全体の内、誰にでも分か

る目に見える部分だからである。

1.2 Communicative Teachingはどのような原理で運用可能な言葉を教えようとするのか

伝達能力の開発につながる学習活動を支える原理についてCommunicative Approachは三つの事を挙げている。それは、①communication principle(意味を伝える伝達行動への参加が学習につながる)、②task principle(言葉の使用が要求されるような有意義な仕事(task)を行う)、③meaningfulness principle(学習は言葉による有意義な情報交換によって促進される)(Richards and Rodgers, 1986)というものである。この学習理論によれば、“information sharing, negotiation of meaning and interaction”(ibid.: 76)を伴う状況の中で実際に使うことによって、言語を学ばせることが出来、この方法による学習を通じて、実際の場面でも学習言語を使い伝達に成功することが出来る(Knight, 2001: 155)こととなる。

1.3 Communicative Teachingはどのようにして3つ原理を教室で実現するのか：

上記に述べたような原理の元にLittlewood(in Van Els, 1984)は‘information gap principle’の重要性を強調している。これに対して、Johnson(in Van Els, 1984)は学習者が何らかの‘仕事(task; e.g. drawing maps based on oral instructions, etc.)’を行う目的で言葉を使うことを要求されるタイプの‘task-oriented activity’を使うことの必要性を強調している。

用語こそ違え、これら2種類の言語活動に共通する考えの根底には、‘fluency activity’

という概念 (Brumfit, 1984) があり、そうした活動は十分に伝達能力を発展させた母語話者が通常の生活で使っているのに可能な限り近い、言葉による ‘interaction’ のパターンを発達させる (ibid.: 69) とする考え方であり、筆者の知るところを整理すると、その練習の特徴として以下のようなものがある。

1. Using languageを通じた伝達に重点を置く；
2. 教師の指導下で行われる伝達の必要・目的のある作業で学習者の動機を高めるもの；
3. 目的・必要を作り出す為にinformation gapが必要；
4. 学習者自身がどのような情報を作り出すかを決める；
5. 学習者自身が如何に伝達するかを決める；
6. 活動や作業が学習者に言語を通じて ‘交渉 (negotiation)’ する機会を与えるもの；
7. 作業の評価は、学習者が使った言語がaccurateかどうかでなく、伝達が成立したかどうかで行われるものであること。

～本井 (2006: 18-19/一部削除)～

このことからfluency practiceは、skill-usingの活動であり、その対極にある ‘accuracy practice’ はskill-gettingの活動と云える。

ここでfluencyという言葉から受ける ‘流暢な英語’ という印象とは違う専門用語としてのこの語の意味範囲をはっきりさせて置くと “the ability to achieve communicative success in a language although you don't speak it very well” (Marks, 2102: 4) というこ

とになる。Accuracy practiceは読んで字のごとく正確さを求める練習である為、学習者はモデルの言葉を聞き取って発話したり、書いたりすることになり、文法上も正しい発話が求められる。従って、教室ではdrillのようなaccuracy practiceの段階では学習者の発話はスムーズで、fluentに感じられるのに対し、fluency practiceの段階になると、ギクシャクし、対応に苦慮する場面の方が多くなる為、通常のfluentという単語の意味から来るイメージに囚われ、誤解しないようにする必要がある。

また、この世界ではcommunicative practice - non-communicative practiceという考え方も並立していることから、以下に ‘communicative practice’ の定義を載せて置きたい：

1. 伝達の目的があること；
2. 伝達への要求を学習者から引き出すこと；
3. 内容重視であり、言語形式重視ではないこと；
4. 様々な言葉を使う必要があるものであること；
5. 作業中教師が介在しないものであること；
6. 教師が教材の内容を操作していないこと、又どの言葉・文法項目を使うようにという指示が無く、学習者の自由になっていること；

～本井 (2006: 19/一部削除)～

一読しただけでfluency practiceと共通性の多いことが分かる (細かい表現については本井2006参照)。

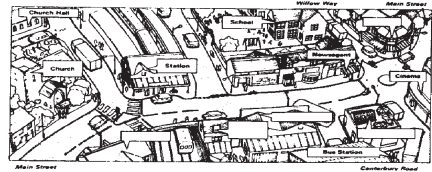
2. Information gap activityとは何か

ここでは、Communicative Teachingの典型的練習方法である‘information gap, role play, task’（Cook, 2008）の一つであり、その3原理に基づく練習方法であるfluency practiceとcommunicative practiceに共通のinformation gapについて検討したい。

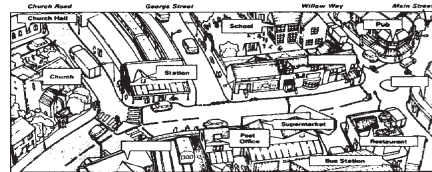
Information gap activityとは、Norman et al. (1986) によれば、2人の学習者が夫々相手の学習者が知らない情報を持って参加するあらゆる言語活動（ibid.: 100）と定義されており、この意味ではRichards/Schmidt (2010) のcommunicative drillや授業の初めに‘昨日何を食べたか’のような実際に起こったことに質問も等質のこととなる。因みに、日本にcommunicativeの方法論を初めて紹介したと自負する米山・高橋・佐野（1981a/b）ではinformation gap activityに関する記述は無いに等しく、提示されている練習はcommunicative drillsに留まっている。しかし、敢えてinformation gap activityという場合、複数の話し手の持っている情報をコントロールしてその落差を作り、言葉の運用を通じて情報交換をし、その落差を埋めるタイプの練習である。言い換えれば、意図的にgapを作って開発する教材ということになる。そして、Norman et al. (1986) では以下の4種類のinformation gap activitiesを認めている。

1. ‘Gap’は教師又はテキストによって作り出され、2人ペアの学習者に、別々の情報を含んだカードを手渡す。言語活動は、学習者が言葉を使って情報を交換するという形で行われる。

A Fill in the missing names, and the names of the streets. Your partner has some other information.



B Fill in the missing names, and the names of the streets. Your partner has some other information.



2. 夫々の学習者は自身の経験や意見に関するアンケート用紙に記入し、その後、お互いに同じことを行ったかことがあるか、同じ意見を持っているか等をチェックする（Gapは学習者の持つ情報によって作り出される）。

Fill in these tables. In the first one, put a ✓ to show what kind of films you *usually like*, or *usually don't like*. In the second one put a ✓ to show which films you have seen, and which ones you *enjoyed*.

Like	Don't like			Like	Don't like
		Westerns	Space films		
		Historical films	Horror films		
		Cartoons	Musicals		

	Seen	Enjoyed
Any James Bond film		
Any Superman Bond film		
Any 'Star Wars' film		
Any Woody Allen film		

Write down the name of the best film you have seen in the last year:

3. Information gapは各パートナーが問題解決に必要な何らかの情報を持っている形の一種のパズルとして提示される（e.g. 2つを合わせると完成する2枚の未完成絵等）。

インフォメーション・ギャップ・プラクティスとは何か又授業のどの部分でどう使われるか

A There are eight buildings in the High Street. Can you identify them all? Your partner has some more information. The bank is next to the chemist's on the north side of the street. There is a pub between the newsagent's and the bank.



B There are eight buildings in the High Street. Can you identify them all? Your partner has some more information.. The tea shop is at the East end of the street opposite the newsagent's. It is next door to the butcher's. The pub is between the newsagent's and the bank, on the opposite side of the road. The supermarket is between the butcher's and the post office.



4. 夫々の学習者がある場面についての半分の情報を含む解説・説明のカード等を与えられ、その場面にあった適切な会話・対話を作り出す作業をする (e.g. 一緒に映画を見に行くのに必要な時間・場所等が情報交換によって得られるよう設定されているもの等)。

A
 You: Work until 5 o'clock every day from Monday to Friday.
 You live in the centre of the town. It is Friday morning.
 The situation: You are not doing anything special on Saturday or Sunday. You planned to go to see a film with a friend this evening. Earlier the friend telephoned to say he had a bad cold so he did not want to go to the cinema. You want to see the film so you think you will go on your own. Here are details of the film from the local paper.
 Your partner will start.

REGAL Mon-Sat. Doors Open 2pm
LCP 7.35 (exc. Sat 8pm)
ARTHUR
From Sun.
LAST DAYS OF ROME

B
 You: Want to go to see a film called 'Arthur'. It is on at the Odeon this week (until Sunday) . The Odeon is right in the town centre.
 The situation: It is Friday morning. You are going away to visit some friends on Saturday and Sunday. You work late on Friday evenings, until 7.30. There is a bus to the town centre just after. It takes 10 minutes. You don't want to go to the cinema on your own. Find out if your partner would like to go. You are not sure when the film starts. Try to make an arrangement (when and where will you meet?) which suits

you both.
 You start: Do you fancy going to see 'Arthur'?

Norman et al. (1986: 102) /一部修正

上記の例1について言えば、双方が相手から自分の持っていない情報を、言葉のやり取りを通じて引き出し、図を完成させれば目的を達成したことになる単純な仕組みである。例2では話者が、例1のように教材によって与えられた情報ではなく、自分自身の事柄に関する情報を相手にとって未知の情報という形で用いてinformation gapを作っている点が違っている。しかし、やはり情報交換が終われば作業も終わるという単純なものである。

例3の場合は、各話者が別々の情報を持っている点では、先の2例と同じである。しかし、獲得情報を使ってパズルを解く形の為、正しい結果を得る為には、それまでに得た図面からの情報、言語活動を通じて得た情報の全てを総合的に活用して考える必要がある。従って、先の2例では必ずしも必要ではなかったような、相手に念押しをするような言語活動を強いられる場面が出てくる可能性を含み、話し手同士のinteractionがより複雑になる可能性を含んでいる。しかし、本質的には情報交換が成立すれば課題も終了するという点で、未だ比較的単純な仕組みと言える。

例4では、一方が映画の詳細情報を持ち、他方が映画を見たいという動機の上に情報交換が成立し、より現実の伝達に近い。従って、同じ映画を見たいということを確認し、以後、待ち合わせ時間、場所等の決定に必要な情報を双方で交換することに成功すれば、この課題は達成される。ここでは、例3同様に得られる全ての情報を総合的に活用して決定する必要があり、この場合、恐らく挨拶から対話

を始めるケースが多いであろうから、話し手同士のinteractionは例3の場合より更に複雑になる可能性を含んでいる。しかし、ここでも、本質的には情報交換が成立すれば課題も終了するという点で、尚、比較的単純な仕組みと言える。何故なら、話し手の間の要求が一致しており、情報間に大きな矛盾がないからである。

このようなことから、所謂information gap practiceと言われるものは、情報交換が成立しさえすれば目的が達成されてしまうという本質的に単純な仕組みのものであることが分かる。

この種の練習方法についてHarmer (2012)は、そこで要求されるinteractionと言葉の性質の違いから、‘closed information gap practice’ と ‘open information gap practice’ の2種類に分けている。この場合、前者は、“the students can use only specific language items” (ibid.: 114) と説明され、後者は “they [= students] can use a range of language items” (ibid.: 114) とされている。前者の典型的な例は以下のようなものである。

学習者に1枚の部屋の絵を渡す。話し手Aはその絵のどこかにサッカー・ボールを置いたと想像する。但し、以後の会話で、話し手Bの質問に対しては‘Yes.’又は‘No.’以外の言葉で答えてはならない。話し手Bは、話し手Aから‘Yes.’の答えが得られるまで‘Is there a soccer ball on/in?’という形で質問を繰り返す。

このinformation gap practiceの場合、関係する話し手双方が使う表現は‘習ったばかりのもの’に限定されることになる。言い換え

れば、information gap practiceの形を採ったAudiolingual Method時代のpattern practiceの再来と言って良いであろう。第1章でも触れているようにinformation gapの存在がfluency practiceのポイントであるが、closed information gap practiceは、相当にaccuracy practice寄りの変種である。

これに対して、上記のNorman et al. (1986)の例4などでは、2人で映画を見に行くという目的の達成のために挨拶を含む様々な表現を駆使することがよりスムーズな言語運用につながることになり、所謂open information gap practiceの良い例ということになる。当然、例2のように、個人情報という集中度の高い性質の情報間ギャップを利用しているものの、2種類程度の表現を用いれば達成可能なものから、例3のようにもう少し多くの表現を必要とするものなど、closed-openの間には、様々な具体例が隙間なく並ぶ状況を想定するのが妥当であろう。この幅広い表現の駆使を要求するタイプのopen information gap practiceをHarmer(2012)はcommunicative practiceと呼んでいる。

上記のようなことから、所謂 fluency - accuracy ; skill-using - skill-getting ; communicative - non-communicativeという対になる専門用語で表される練習方法の関係を図示すると図1のようになるといえる。

これらclosed/open information gap activityのような、ある意味で単純な情報移動で終わってしまう作業を、Doughty/Pica (1986)は‘one-way information gap task’と呼び、この作業では本質的には情報交換は求められていないとしている。そして、そこでは参加者自身が問題解決行動に参加するかどうかを決め、しばしば自信があり、言葉に堪能な学習

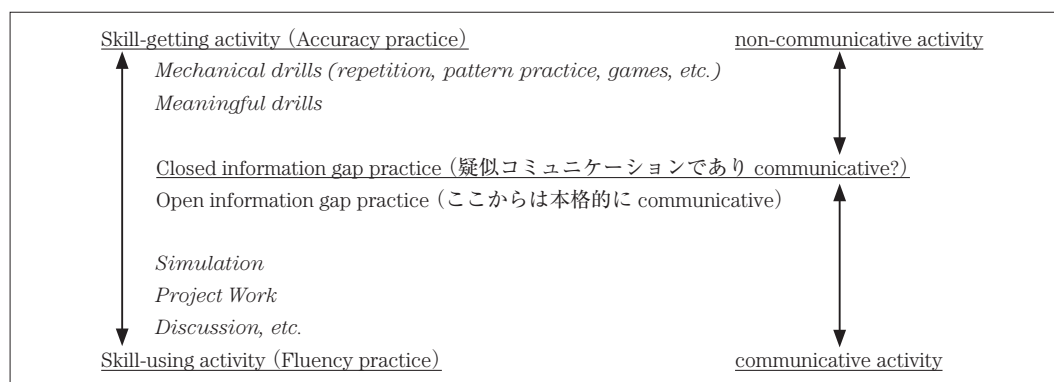


図 1

者が会話を進め、語学力の弱い学習者は身を引いてしまう (ibid.: 307) という問題指摘をしている。

一方、彼らが ‘two-way information gap task’ と呼んでいるものは、‘夫々の参加者が、他の全ての参加者が問題解決の為に必要であるにも拘わらず持っていない情報を持っており、そうした情報を参加者間で交換することを通じて問題解決を図ることが求められるようなtask’ (ibid.: 307) と定義されており、単なる情報交換による目的の達成を超える要素を持っている。何故なら問題解決の為に、推理 (inference)、演繹的推論 (deduction)、実践的推論 (practical reasoning) のような方法、又は情報間の関係性やその形式・様式の認識を通じて何らかの新しい情報を作り出す (Prabhu, 1987) 必要もあるからである。これは単なる情報交換に留まる information gap activity よりも範囲の広い、‘task’ の範疇に入るものであり、Task-based Learning の研究課題となる。

Doughty/Picas (ibid.) は、taskにつながる two-way type が言語習得に貢献するとしているが、Fernández-Gracia (2007) は、one-way type でも two-way type と同様に ‘negotiation’

が起こるとしているところから、どのような貢献をしているかは更に研究を深める必要がある。しかし現段階では両タイプに有用性を認めて置くことが妥当だろう。

このような事柄を踏まえ、以下に skill-using - skill-getting ; one-way information gap - two-way information gap という対になる用語に加え、Communicative Teaching の典型的練習方法である role play (Pair Work の形態と Group Work の形態が存在する) との組み合わせを図示すると図 2 のようになる。

3. Information gap activity は授業の中でどのように使われるのか

ここまで Communicative Teaching と呼ばれる方法論について知り、典型的教室活動である information gap activity と task とが部分的に重複することやその性質について見てきた。そして、この章ではこの練習方法が実際の授業の中のどのような段階で用いられ、どのような役割を果たすのかという問題について検討することにしたい。

既に伝統的と呼ばれ、現在でも比較的低レベルの学習者の場合に必ずといって良いほど使われる授業の組立が、PPP (Present-

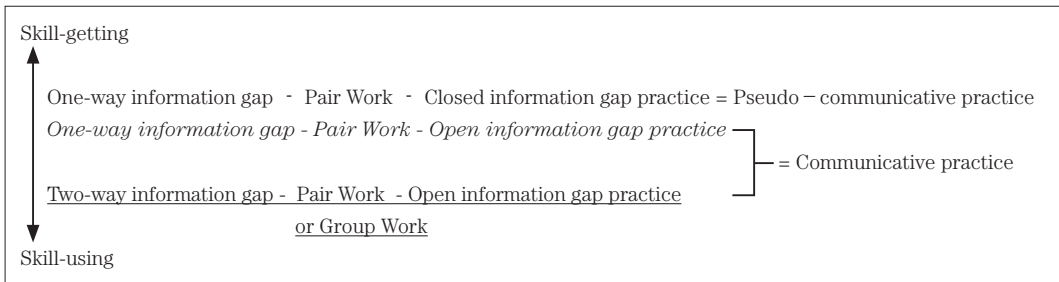


図2

Practice-Produce) methodである。これは1950年代のaudiolingualismにその起源を有し、当該授業で習うべき言葉を教え、様々なタイプの練習を順番に積み重ね (drill > controlled practice > less-controlled practice；英国の英語教師はvarieties of practiceと呼ぶ)、最終的に自由な発話の練習 (freer practice) に取り組むというものである。これについてLittlewood (1981) は、第二段階のpracticeの部分audiolingualism時代のようなdrillの積み重ねではなく、教師による教材のコントロールの度合いに応じて練習を段階的に配列する図3の様なものとしている。そして、この図の‘control’の部分PPPの‘practice’の段階であり、‘creativity’の段階が、‘produce’に当たる。

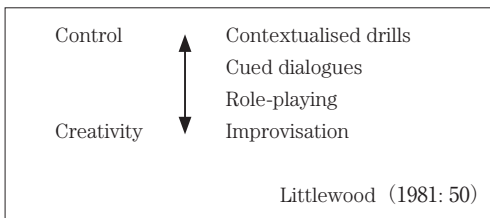


図3

この方法は、従来英国の英語教師養成コースでよく教えられ、実習授業を通じて練習されていたが、1990年代になると教師中心の形態 (teacher-centred) であること及びヒューマニスティックで、かつ学習者中心 (learner-

centred) の方法論との整合性が取れないことから、強く批判を受けるようになっていく (Harmer, 2007: 66)。また、これはRoyal Society of Arts (RSA) の教師養成コース (現在のUCLES CELTA course) での主流の方法論であったことからRSA wayとも称されるが、教育実習生に唯一の方法を教えるべきではないとの立場からも批判され、現在では色々な方法にチャレンジさせるべきという形で決着をみたとされている (本井, 2009: 85-90)。しかるに、既述のように入門、初級段階では‘skill-getting’の要素の大きな授業が多くなるため、現在でもこの方法が重宝されている事実もある。

筆者の経験では、1980年後半International House Londonの教師養成コース中で参観した多数の中級レベルの授業では、この方法が主流であり、圧倒的多数が1時間半で最後のfreer practice (improvisation; 即興的な課題に挑戦するタスク) まで到達するものであった。従って、非常にテンポが速いという感覚を持つと同時に、最後のfreer practice部分が10分程度で短いという印象を受けた。また、その授業を受けている日本人学生は、余り多くを喋らないという印象を強く持ったことも事実である。

第2章で議論して来たinformation gap practiceは、図3の‘control’の段階の下位

項目 ‘cued dialogue’ と ‘role-playing’ の段階で使われるものということになる。

Communicative Teachingがrole-playをその教室に於ける作業の特徴としているにも拘わらずcued dialogueを含めるのは、既に議論したclosed information gap practiceが使われるべき言語表現を厳しく制限するため、よりcued dialogueに近いものだからである。因みに、英国での実習授業では、closed information gap practice的教材の場合、配布されるハンド・アウトについて、“ハンド・アウトに使うべき英語表現を書き込まないで下さい。学習者はその前の段階で練習に集中しなくなるから”との指導が頻繁に行われているのを筆者は聞いている。やはり、習ったばかりの表現をスピーディーに使い、沢山練習することが目的の段階であり、意味への集中が弱くなる傾向がある。このことから、第2章で触れたように、Doughty/Picaがone-way information gap taskは余り言語習得に貢献しないとしている可能性もある。

当然、role-playの段階は、open information gap的な教材が使用される段階であり、最後のimprovisation (= produce) の段階では、教師は基本的に場面を与えるだけということになる。その為この段階は既に述べたように短時間で、単なるcommunicative practiceに終わってしまう傾向もあり、using languageのボリュームは小さい。このことから、この部分だけを別の時間帯に持っていき、もっとボリュームの大きな ‘task-based’ の取組みを開発しようとする試みが出てくると云える。しかし、その部分の検討はこの小論の目的ではないことから、議論はここで留めることにする。

それでも、open information gap practiceの

段階はdrill等に比してusing languageのボリュームが大きなskill-using の練習であり、one-way typeも、two-way typeもそれに含まれることから、Fernández-Gracia (2007) は、one-way type でも ‘negotiation’ が起こり得るとしているのであろう。

4. PPPとTest-Teach-Test

第3章で詳述したPPPでは、語学の授業で行うべき3つ学習活動が ‘focus on language forms (言葉の形式に焦点を当て集中する)’ > ‘analysis of language (形式情報を分析し、意味を含む言葉の理解をする)’ > ‘language practice (理解した言葉の練習を行い身に付ける)’ の順序で行われる。筆者の経験では、最初の二段階はほぼ一体化しており、“学習者にルールの説明をしても理解されない。Teacher talking timeを短くし、数分でこの段階を終わるように”という指導をされることが多い。既に述べたように‘produce’ stageは10分程度と短い事から、これは第3段階のlanguage practice (= ‘practice’ stage) に長い時間を割く方法と言える。従って、この授業構成はRevell (1979) の以下のような主張を、練習量を増やすという形で追求するものと言える：“Communicative teachingの重要性を強調することは、structural teachingを最小化することを主張するものではない。学習者はそれに必要な言葉の習得なくして伝達能力 (communicative competence) を発達させることはない (Revell, 1979: 90/本井訳)”。一言で言えば、教えたら直ぐにmeaningful drills/practicesの形で沢山使わせ、information gap practicesを経て、自由な発話につなげるという考え方と言える。

これに対する批判は、Language Practiceの

前半部分（skill-gettingの練習）が大きく（varieties of practiceであれば当然なのだが）、機械的練習に依存する傾向が強いこと及びLanguage Practiceの最終段階が、自由な発話を行うという理想とは異なりopen information gap practice的なものに終わってしまう傾向があり、結局今習ったものを使うだけに終わることに向けられる。

こうした批判を受けて提案されているのが、Test-Teach-Testと呼ばれる方法である（図4）。これは、ある程度言葉を知っている学習者には、最初に言葉を使わせ、当日教えるべき表現を知らないことを確認し、教え、更に練習を積み重ねる方法が良いとする考えである。

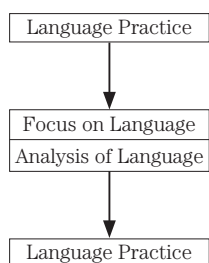


図4

その弱点は、第一に、最初の‘Language Practice (information gap practice)’を行った段階で、学習者が予定していた表現が使える場合（日本では全員が表現が使える可能性は低い）、用意した教材が無駄になることにある。また、もう一つは、話させ、言葉を使わせ、練習を繰り返すが、簡単な日常的場面对処する以上のレベルで言語習得が行われるかどうかは明快でなく、PPPの弱点を根本的に克服出来ないことにある。本質的には‘Practice-Present-Practice (-Produce)’版であり、単なる情報のやり取りで完結する

information gap practiceの限界を超えることは出来ないと言われる。このことが、Test-Teach-Testをmethodのレベルに留め、言語使用ボリュームの大きな、Task-Based Learning (methodology) の研究に焦点が移って行く理由であろう。

5. 結論に代えて

－中学検定教科書とinformation gap practice

一例として中学校用検定教科書で現在使用されている*New Crown English Series 2*（2年生用）のLesson 1では、最初に‘Get’と呼ばれる節がある。次に‘Use’と呼ばれる節がある。編者によって‘skill-getting’と‘skill-using’の用語が意識されているかのようである。更に、‘Write’という節では、ある文書を読み、同じように書く練習をし、最後に道案内の対話がある。後半の二節は、writingとspeakingの技能領域を扱い、言葉の学習とその運用を組合せた一種の統合シラバス (integration syllabus) に基づくようである。

中身に関しては、‘Get’が、対話練習（‘過去形’とその項目の繰り返しの多いテキストでfinely-tuned inputと言える性質のもの）> Drill > Practice (listening – speaking – writing) という流れになっている。そして、‘Use’の部分はreading practiceであり、Lead-inと思しき日本語の質問 > ‘Get’の対話の内容に関連した内容の64語のパラグラフの読み > In-readingの質問×2種類 > Post-reading Practice (読んだテキストから新しく知ったことを書き出す) というものである。‘Get’はPPP、‘Use’は“Pre-, in-, post- for receptive skills” (Woodward, 2001) と呼ばれる伝統的な受信技術のための授業である。

上記から、中学校の教科書は、PPPに基づ

く構成の教材であることが分かる。しかし、練習を詳しく見ると、意味に注意の向かわない単純なdrillからmeaningful drillの段階に留まっている。これが、1990年代に中学でinformation gapを含むゲームを多用し、結果遊びと受け止められ萎んでしまった(望月, 2001) ことの影響かどうかは不明だが、information gap practiceはない。従って、図1のClosed information gap practice > Open information gap practice以降、Simulation/Project Work/Discussionのようなtask-basedにつながる性質の取組みの創造は教師の教材開発や授業構築の努力に任されることになる。また、読む領域ではinformation gapと同じ性質のreadingの練習である‘jigsaw reading’はない。故に、ここまで作業を拡張するか否かも、教師に任されていると言える。

上記のことから、教師は、ここで取り上げたgap principleの研究とその具体化の実践に加え、採用される中学校指定教科書について、シラバス、教材の構成方法などの資料を分析し、その特徴を掴んで対処する必要がある。同時に、使うべき教材を学習者と授業の仕組みに合致したものにす為、自在に‘adopt(採用)’、‘adapt(改変)’、‘create(創造)’する能力を身に付け、将来独自のtaskの開発・運用にまでつなげる力を獲得することが求められていると言える。

参考文献

- Brumfit, C. (1984). *Communicative methodology in language teaching: The role of fluency and accuracy*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cook, V. (2008). *Second language learning and language teaching*. 4th edition. London: Hodder Education.
- Doughty, C. and T. Pica (1986). “Information gap’ tasks: Do they facilitate second language acquisition?” . *TESOL Quarterly* 20/2.
- Fernández-Gracia, M. (2007). “Tasks, negotiation, and L2 learning in a foreign language context” . In M.P. Ggarcía Mayo (2007). *Investigating tasks in formal language learning*. Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- Harmer, J. (2007). *The practice of English language teaching*. 4th edition. Harlow: Pearson Education Ltd.
- Harmer, J. (2012). *Essential teacher knowledge: Core concepts in English language teaching*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Knight, P. (2001). “The development of EFL methodology”. In C. N. Candlin and N. Mercer (eds.) (2001). *English language teaching in its social context*. London : Routledge.
- Littlewood, W. (1981). *Communicative Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Marks, J. (2012). “In praise of pronunciation” . *English Teaching professional* 81: 4-6.
- 望月 昭彦 (2001). *新学習指導要領に基づく英語科教育法*. 東京：大修館書店.
- 本井 昇 (2006). *教育実習生のための外国語教授法*. 第4版. ロンドン：英国国際教育研究所出版局.
- 本井 昇 (2012). ‘コミュニケーション重視の授業開発は使っている練習の再検討から’. *埼玉学園大学紀要(人間学部篇)* 12: 135-145.
- 文部科学省 (2008). *中学校指導要領解説 外国語編*. 東京：開隆堂出版.
- 文部科学省 (2010). *高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編*. 東京：開隆堂出版.
- Norman, D. et al. (1986). *Communicative ideas: An approach with classroom activities*. Hove: Language Teaching Publications.
- Prabhu, N.S. (1987). *Second language pedagogy*.

- Oxford: Oxford University Press.
- Revell, J. (1979) . *Teaching techniques for communicative English*. London: Macmillan Press Ltd.
- Richards, J. C. and T.S. Rodgers (1986) . *Approaches and methods in Language teaching: A description and analysis*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Richards, J.C. and R. Schmidt (2010) . *Longman dictionary of language teaching and applied linguistics. 4th edition*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Rivers, W.M. and M.S. Temperley (1978) . *A practical guide to the teaching of English as a second or foreign language*. New York: Oxford University Press.
- Sato, K. (2002) . “Practical understandings of communicative language teaching and teacher development”. In S. J. Savignon (Ed.) (2002). *Interpreting communicative language teaching*. New Haven: Yale University Press.
- 高橋貞雄 et al. (2011) . *New Crown English Series 2*. 東京：三省堂.
- 鳥飼玖美子. (2011) . *歴史は眠らない：英語愛憎の200年*. 東京：NHK出版.(及びその関連TV番組)
- Van Ek, J.A. and J.L. Trim (1998) . *Threshold 1990*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Woodward, T. (2001) . *Planning lessons and courses*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 米山朝二・高橋正夫・佐野正之. (1981a) . *生き生きとした英語授業1*. 東京：大修館書店
- 米山朝二・高橋正夫・佐野正之. (1981b) . *生き生きとした英語授業2*. 東京：大修館書店.